

ファンタジー文学における 新しい家族のかたちの試み — *His Dark Materials* シリーズを中心に —

鈴木 宏枝

〈要旨〉

フィリップ・プルマン (Phillip Pullman, 1946-) の *Northern Lights* (1995)、*The Subtle Knife* (1997)、*The Amber Spyglass* (2000) の三部から成る *His Dark Materials* シリーズは、ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-74) の *Paradise Lost* (1667) を下敷きに、パラレルワールドの中で、謎の粒子「ダスト」の解明と、アダムとイブになぞらえられる13歳のライラと同世代のウィルによる世界の秩序の回復の物語である。ライラの実の両親であるアスリエル卿とコールター夫人は、自分の権力欲のために娘を利用しようとする人物であり、ウィルも孤児に近い。作品には、旧来の制度の中で子どもを守る家族の代わりに、より多様な共同体性と子どもを守る人間関係が構築され、舟の民族ジプシャンはライラを守り、物理学者のマローン博士は、不思議な骨格をしたミュレファという生きものと暮らし、調和的で愛に満ちた社会に感動する。ウィルとライラは愛し合うようになるが、調和を取り戻したのちには、住む世界が違うために別れなければならない。*Paradise Lost* では「楽園追放」が、男と女が、互いに生きるべき世界へ踏み出していく祝福と解釈されているが、ウィルとライラも、家族になる前段階の絆を得て、ロマンティックな愛の記憶をもって荒野を生きていくことを決心している。

キーワード：ファンタジー、「ライラの冒険」シリーズ、プルマン、共同体、愛

はじめに

イギリスのフィリップ・プルマン (Phillip Pullman, 1946-) が書いた *Northern Lights* [英] / *The Golden Compass* [米] (『黄金の羅針盤』, 1995)、*The Subtle Knife* (『神秘の短剣』, 1997)、*The Amber Spyglass* (『琥珀の望遠鏡』, 2000) から成る *His Dark Materials* シリーズ (『ライラの冒険』シリーズ) は、パラレルワールドのオックスフォードに住む13歳の少女ライラ・ベラクア (Lyra Belacqua) と、私たちと同じ世界に住む12

歳の少年ウィル・パーリー (William Parry) の出会いと冒険を軸に、複数の世界が絡みあうファンタジーで、「ヒズ・ダーク・マテリアルズ神の暗黒物質」の探求が語られている。*Northern Lights* がカーネギー賞とガーディアン賞を、*The Amber Spyglass* がウィットブレッド賞を受賞し、ファンタジーとして、また、児童文学として高い評価を受けている。

ファンタジーという文学形式では、不思議なできごとに対する科学的説明や根拠は不要で、別世界の構築、小人や口をきく動物など非人間との関係、アニミズムなどの「驚異」が自在に展開される。妖精物語¹⁾の創作を論じた J. R. R. トールキン (J. R. R. Tolkien, 1892-1973) は「準創造」(Sub-Creation) が、「創造主である神に似せて創られたという人間に、神から与えられた権利」(トールキン, 227) であると考え、

もしも「妖精物語」の世界が、第一の現実世界を反映するものであり、その本来有るべき姿をありありと見せる働きをするものであるならば、この世界は悲しみや苦しみを本質とするのではなく、「福音」とその「喜び」をこそ本質とするものでなければならぬだろう。

(228)

と述べる。すぐれた妖精物語すなわちファンタジーは、おのずと、現実世界における制約を乗り越えうるオルタナティブで緻密な世界観を示す。既成の社会や価値観に沿うだけならば、別世界を作る必要はない。ファンタジーが組み立てる世界にはその世界ならではの秩序と一貫性があり、現実社会が投影されつつ、その現実に対する反駁をおこない、なおかつ、その反駁を踏まえた希望を伝えるものになっているはずである。*His Dark Materials* シリーズは、現実世界を反映しつつ、まさに、「準創造」の中で「福音」とその喜びを伝えている。

作品は、間テクスト性²⁾がきわめて豊かで、特に、ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-74) の *Paradise Lost* (『失樂園』, 1667) を土台にしている。*Paradise Lost* は12000行を越える叙事詩で、旧約聖書の「創世記」に含まれる「楽園追放」をモチーフにしている。

Paradise Lost では、神に叛逆して暗黒の地に落とされたサタン (Satan) が、一緒に追放された墮天使たちとともに再び神に対抗しようとしている。サタンは、物理的な戦いだけでなく、神が創造したアダム (Adam) とイブ (Eve) を誘惑して神の計画をだいにしようとするが、その企ても神は予見し、アダムのもとへ大天使ラファエル (Raphael) を遣わし、警告する。サタンは、アダムのいない隙にヘビの姿になってイブを誘惑し、神が禁じた知恵の木の実を食べさせる。だが、神はそれも予見している。アダムには労役、イブには出産の苦しみを課して、エデンの園から追放するが、それと同時に、やがて神の子であるキリストが降臨して人間が救済されることも伝えられる。

「創世記」に記されたアダムとイブの「楽園追放」は、根本的に悲劇的なものと捉えら

れてきた。絵画芸術では、ミケランジェロ（Michelangelo di Lodovico Buonarroti Simoni, 1475-1564）の「システーナ礼拝堂天井画」（Cappella Sistina, 1508-12）の一部である「楽園追放」も、プーレンブルフ（Cornelis van Poelenburch, 1594-1667）の“The Expulsion from Paradise”（「楽園追放」1646）も、アダムとイブはみじめな様子で裸の体を隠し、追い立てられるように荒野に出ていく。

しかし、ミルトンが示した「楽園追放」は、むしろ、キリストの降誕を待ちのぞみつつ、自らの手で耕し、子を産み育て、限りある命を生かしながら生きていくという道が人間に与えられたことを寿ぎ、むしろ、あたたかく送り出す神と天使たちの大きな慈愛の結果のように見える。アダムは、ヘビに誘惑されたイブと運命をともにし、2人が楽園を出るときには手に手を取り、大天使に守られながら歩み出していく。

His Dark Materials シリーズも、冒険の旅の中で、キリスト教の絶対性や「楽園追放」にまつわる負のイメージを転覆しつつ、真に人間らしく、愛情をかわしあえる関係はどのようなものなのかを壮大な世界観の中で探る。これまで、シリーズは、神学やキリスト教の観点や、*Paradise Lost* との連関から論じられることが多く、神とサタンの寓意性、対立関係を乗り越えたところに生まれる調和が考察されてきた。本論では、それをふまえた上で、既成の価値観をうち崩して、よりあたたかい慈愛の関係性を構築するという点で、これまで論じられてこなかった作中の家族の問題を考え、新しい家族のかたちがどのようにファンタジーに織り込まれ、主題を補完しているか考える。

Northern Lights は、一天使に過ぎないオーソリティ（Authority）が自分を創造主と偽って権威を打ち立て、摂政である別の天使のメタトロン（Metatron）が教会を制度化して、支配を強めようとしているという情勢から始まる。権威のための教会組織が硬直した制度が社会を支配しようとするとき、家族という形態にも、かくあるべきであるという圧力をかけられる。三部作は、その抑圧を解き、人間らしい自由と愛を取り戻すまでを描くもので、助け合い、愛し愛されながら生きていけることを祝福ととらえている。この世界の中では、一元的な管理社会がめざす硬直した家族制度も否定され、より多様な家族像や人間関係を認める新しさを提示するのではないだろうか。肉親による家族を越えて、家族に似たどのような人間関係が可能なのかを、シリーズに備わっている希望や励ましの力とともに確認したい。

1. 作品世界について

(1) 「ダスト」とは何か

His Dark Materials シリーズで最も重要なのは、「^{ヒズ・ダーク・マテリアルズ}神の暗黒物質」とは何かという問いである。平行する複数の世界がある中で、作中の設定では、30000年ほど前に宇宙で何らかのビッグ・バンが起き、細かい粒子が、複数の世界のすべてに降り注いだとされる。粒子は、高度知的生命体になれる素地のある生命体に刺激を与え、それぞれの世界で進化が

始まっていく。主人公のライラやウィルの世界では、知的で共同的な人間が生まれ、別の世界ではまた別の知的な生命体が誕生している。

それぞれのパラレルワールドの中で、この粒子には異なる名前が与えられ、ライラの世界では「ダスト」、ウィルの世界では「シャドー粒子」ないしは「^{ダーク・マター}暗黒物質」、人間ではないが高度に知的で穏やかなミュレファという生き物のいる世界では、ミュレファによって「スラフ」と呼ばれている（便宜上、本論では「ダスト」で統一する）。「ダスト」はつねに天から降り注ぎ、知性や愛、好奇心などを与え続けている。「ダスト」は、「創世記」における「知恵の木の実」の役割に相当し、しかし、木の実と異なる点として、「ダスト」じたいが生きているかのように意思や感情を持つ。人間が人間らしくあたたかい関係を作りあって生きていくことを促す生命体で、魂のようなものともいえ、人が死ぬと解放され（聖書の「塵から生まれ、塵に返る」の解釈である）、コンピュータ画面を使って、博士に話しかけることさえする。

人間の世界では、「ダスト」は子どものまわりではなく、大人のまわりに多く見られ、特殊な機械を使うと粒子をして見ることができる。*The Amber Spyglass* では、メアリー・マローン（Mary Malone）博士は手作りのプレート式のレンズから透かして観察し、「日ざしの中に見えるほこりやちりのように、コップの水の中の分子のように、でたらめにただよって」（*Amber* [邦訳] 349）いる様子に感嘆する。

主人公のライラは、父親のアスリエル（Asriel）卿のものだった「^{アレンシオメーター}真理計」という羅針盤のような道具の使い手となるが、この道具もダストに関わる。真理計は、文字盤に30の象徴が描かれ、知りたいことを心に浮かべると、青い針と赤い針が様々にその象徴を指していく。各象徴には複数の意味があり、針の動く順番や回数まで含め、読み解くことはきわめて難しく、通常は学者が本で調べながらやっと1つか2つの意味を知ることができるのである。だが、ライラはすぐにすらすらと読み解くことができ、文字通り、今ここにいない相手の状況や、過去に起きたこと、これからどのように行動するべきかという「真理」を正しく知ることができる。真理計はダストを利用し、ダストは、この世界を救済するためにライラを必要としているので、ライラはいわば選ばれた者として真理計と対話する能力が得られるのである（ゆえに、すべての冒険が終わり、危機が終わり、精神的にも感情的にも成長をとげたとき、ライラは急に真理計が読めなくなる）。

ダストは平等にそれぞれの世界に降り注いでいたが、数千年前にたまたま濃度高く集まったときに天使という種族が生まれる。天使はダストそのものなので、ぼんやりとした気配がする。自分自身のことは「なんであるかといえば、精神だ。することから判断すれば、物質だ。物質と精神はひとつのものだ」（*Amber* [邦訳] 323）と説明している。

やがて、天使の中から、自分が創造主であると詐称するオーソリティが生まれ、メタトロンが摂政となる。メタトロンはオーソリティを神格化し、輿の中に入れて、1000年以上も生かしつづけて、人間への支配の道具にしている。また、本来、人間が死ぬとそのダストは解放されてまた空中に戻っていくべきものであるが、オーソリティとメタトロンは

「死者の国」を作って、死者を閉じこめ、永遠の無の中に置く。オーソリティを絶対者とする教会組織がライラの世界では規律監督法院で、ダストの研究をすることを危険視し、自由な学府であるはずの大学にも圧力をかけてくる。

(2) ライラの世界と「ダイモン」

ライラが住む世界では、人間はみな「ダイモン」と呼ばれる生き物と不可分である。ダイモンは持ち主の子ども時代には、時と場合に応じて様々な動物に姿を変えるが、ある時期に、ひとつの動物に形を決め、その後は生涯変化しない。これが、この世界における精神的な成人といえる。ライラのダイモンの名前はパンタライモン (Pantalaimon) で、鳥や魚や小動物など様々な生き物に姿を変え、当然、つねにライラのそばにいる。ダイモンはその人の魂のようなものであり、長く離れていることは不可能であり、ダイモン同士が戦えば、ダイモンへの攻撃はダイモンだけでなく持ち主にも苦痛を与える。また、相手のダイモンに触れることはきわめて失礼な禁忌であり、その人の最も大切にプライベートな存在であるともいえる。

ライラの世界では、規律監督法院がダスト研究を禁忌化し、ダストとは何かを探ろうとすると命も狙われるような情勢になるのと平行して、「ゴブラー」(gobbler) が子どもをさらう事件が頻発している。「ゴブラー」が何かは謎だが、やがて、マリサ・コールター (Marisa Coulter) 夫人という女性が組織する「総献身評議会」(General Oblation Board) の頭文字を取った通称であることが分かる。コールター夫人は政治家の未亡人で、権力を強く欲している。女性であるために「総献身評議会」の表舞台には立てないが、教会が進めようとしている支配活動に協力する姿勢を見せることで発言力を得ようとしている。夫人は子どもをさらい、ダイモンと人間の間に特別なギロチンを落として互いを切り離すという残酷な実験をおこなっている。規律監督法院は、ダイモンを失ってものを考えることができなくなった人間を操りやすいからであるが、実験台にされた子どもは文字通り魂を抜かれ、ダイモンを失った恐怖を抱えたまま、本当に死んでしまう。コールター夫人は、ライラの実の母親で、ダイモンは金色の毛並のサルである。形の定まったダイモンはその人を最もよく表すため、美しく、凶暴で、知恵のあるサルはコールター夫人にふさわしい。

また、*Paradise Lost* におけるサタンの役割を担うのがアスリエル (Asriel) 卿で、ライラの叔父とされているが、やがて、実の父親であることが判明する。オーソリティに對抗しようとしてダストの謎を追い、ダストがオーロラとして集中して見られる北極地方まで探検に出かけ、そこに要塞のような研究施設を作っている。彼は、ダイモンと人間を切り離すときに生まれるエネルギーを利用して自在に別世界に行き、オーソリティの支配力を超えた権力者になろうとしている。ダイモンはユキヒョウで、野性味と美しさを兼ね備えている。

(3) ウィルと「神秘の短剣」

ウィルは、「神秘の短剣」の守り手となる少年である。パラレルワールドの1つであるチッタガーゼでは、300年ほど前に、科学者が分子レベルで何でも切れる「神秘の短剣」を作った。空気さえも切り裂くことができ、その短剣で空中をドアの形に切ると、別世界に行くことができる。科学者は、短剣を使って様々な場所に通り口を開けて探検に行ったが、ふさぐことをしなかった。そこから、やがて、チッタガーゼは暗黒の奈落世界ともつながってしまい、生命力の源ともいえるダストが流出し、さらに、逆に「スペクター」と呼ばれる悪鬼が侵入してくるようになっていく。チッタガーゼにおけるスペクターは、大人だけを狙ってとりつき、魂を食いつくして廃人にしてしまう。

ライラとウィルは、それぞれの世界で別々に追手から逃れ、かつて科学者が開けっ放しにした入口から、偶然にチッタガーゼにやってくる。そこにいるのは、保護者を失ってホームレスのようになった子どもたちだけである。ただし、町の中心にある塔の中に「神秘の短剣」と守り手の老人がいて、ウィルを「短剣の守り手」と見抜く。老人は、短剣で空気中を切り裂いて世界をつなぐ通路を作り、指先に精神集中して、またそれを閉じるやり方を教えてくれる。

シリーズは *Northern Lights* で世界観が示され、*The Subtle Knife* でパラレルワールドの成り立ちとライラとウィルの役割が明らかになり、*The Amber Spyglass* で決着がつく。ライラとウィルはオーソリティとメタトロンが作った死者の国に行き、死者たちが閉じこめられるのではなく、境界の外に出て再び粒子に戻っていくことが解放になることに気づき、死者の魂を生ける世界に解き放ち、ダストに還していく。そのライラを追ってきたメタトロンは、ライラの両親であるアスリエル卿とコールター夫人と戦いになり、三者はもろともに奈落に落ちていく。神秘の短剣で開けられた通り口を、ひとつひとつ指先で閉じていく役割は、ウィルが負うことになる。

2. ライラとウィルから奪われた庇護

(1) ライラの場合

ライラの両親もウィルの両親も、子どもを庇護するという、肉親に求められる第一義的な義務をほぼ放棄していると言っていい。ライラは、孤児だと聞かされ、オックスフォードのジョーダン学寮に預けられて育ってきたが、本当の両親はコールター夫人とアスリエル卿である。コールター夫人は、政治家のエドワード・コールター (Edward Coulter) 氏の妻だったが、アスリエル卿と愛し合い、アスリエル卿は自分の敷地内に入ってきたエドワードを殺した。コールター夫人は未亡人のまま、秘密でライラを産み、学寮に預けたという過去がある。

大学にダスト研究を妨げる圧力がかかり、大学に出入りしているアスリエル卿がねらわれるようになると、学寮長は、保管していた「真理計」をライラに渡し、学寮から出るこ

とを促す。このとき、素性を隠して後見人としてライラを引き取ったのがコールター夫人で、最初はそのあでやかさと華やかさに魅了されたライラだったが、偶然に、夫人がゴブラーのリーダーであるだけでなく、自分の母親であることを知り、猛然と反発する。

アスリエル卿は、ダストの正体を知ろうという知識欲だけでなく、ダストにまつわるエネルギーを用いることで別世界に行かれることに気づき、その途方もない力をわが物にして、オーソリティに反抗しようとしている。彼は、ライラにとって許しがたい人間である。ライラがコールター夫人の施設から助け出した友人のロジャー（Roger）を連れて、真理計を届けるつもりでアスリエル卿の要塞に行くと、アスリエル卿は、ロジャーを捕まえて恐怖の機械にかけ、ダイモンと分離させて、そのエネルギーで別世界への道を開くのである。当然ロジャーは死ぬが、アスリエル卿は、子どもの生命の尊さにもライラの感情にも興味がない。

ライラは、そもそもの始まりから、家族を築きようのない男女の性愛的結婚をめぐるエゴのぶつかりあいから誕生し、肉親的な家族関係から切り離されているといえる。ライラの強さはその事実に関わりなく、実の母親であることが分かっても猛然とコールター夫人と戦い、アスリエル卿を批判する点にある。コールター夫人が、女性の魅力と口先で政界の裏社会に君臨し、自分の娘であっても利用しようとする強さは、皮肉にもライラに受け継がれる。ライラは、オックスフォードでおてんばな少女時代を送っているときから、口から先に出まかせをいい、その話術で子どもたちを手なづけ、反省しているふりをして大人を騙す。その才能は北極に向かう旅の途中で役に立ち、友人の「よろいをつけたシロクマ」族のイオレク・バーニソン（Iorek Byrnison）のために一世一代の芝居を打つ。ライラは、イオレクから卑怯なやり方で王位を奪った別のシロクマに「自分はイオレクのダイモンである」という最大級の嘘をつき、ダイモンをめぐって戦うという舞台をととのえて一騎打ちをさせ、イオレクに王位を取り戻させるのである。イオレクはライラに敬意を表し、ライラ・ベラクアという本名の代わりに「ライラ・シルバタン（雄弁）」という名前を贈る。コールター夫人から受け継いだこの才能は、皮肉にも、コールター夫人の裏をかき、彼女から逃げるときに最も効果を発揮する。

コールター夫人とアスリエル卿という両親が、きわめて捻じれた形でライラへの愛情を見せる点は興味深い。コールター夫人は、ライラがイブの役割を果たすことを魔女から聞き、ヘビに誘惑されて知恵の木の実を食べるという「墮落」を阻止しようと思ひ込む。ヘビの役割を果たすのは、ウィルの世界から来る物理学者のメアリー・マローン博士であるが、ヘビに出会わせないために、ウィルと一緒にいたライラをさらい、小さな山間の村近くの洞窟に隠れ、眠り薬を飲ませ続けて、監禁するのである。異変に気づいた村の少女とウィルによってライラは救出されるが、コールター夫人の歪んだ愛情が残像として残る。

物語の終盤、ライラとウィルは、アスリエル卿に殺されたロジャーの霊に会うために死者の国にやってくる。死んでいないのに死者の国に入るために、ライラはダイモンのパンタライモンと離されなければならない。ひどい苦痛を抱えながら歩くライラとロジャーを

様々な人物や天使が追いかけている。特に危険なのは、天使のメタトロンであるが、彼がライラを追っていることを知ったコールター夫人は、最大級のうそをついてメタトロンを誘惑し、油断させたところで戦いを仕掛ける。

でも、わたしはライラを愛してるわ。この愛はどこから来たのかしら？ わたしにはわからない。夜のあいだに、泥棒みたいにわたしのところへ来たのよ。いまわたしは、胸がはり裂けそうなくらいライラを愛している。わたしはただ、わたしの罪がとほうもなく大きくて、その愛が罪の陰に隠れてカラシの種くらいの大きさにしか見えないことだけを願ったのよ。

(Amber [邦訳] 519)

アスリエル卿は、コールター夫人への愛情ゆえに彼女の味方をする。メタトロンは強く、2人は負けそうになるが、最終的に2人がかりでしがみつki、メタトロンと共に奈落の底に落ちていく。ライラは、その犠牲によって救われるが、真実を知ることはない。家族になるはずだった肉親の3人は、決して温かいきずなで結ばれることなく、永遠の別れを迎えるのである。

(2) ウィルの場合

ウィルは、影のある少年で、愛想がなく、つねに冷静である。生後間もなく父親が失踪し、母親と二人暮らしをしてきたが、その母親が精神疾患を抱え、強迫的な行動をとったり、だらしない身なりで人前に出たり、ウィルを巻き込んで万引きをしたりする。ウィルは母親をかばい、なるべく目立たないように暮らし、母親の世話をしてきた。父親の残した秘密をめぐる家が荒らされたり、不審人物がうろろうしたりすることが続き、侵入者を突き飛ばして誤って殺してしまったとき、母親を信頼できる近所の人に預けて、逃げた先で別世界に続く入り口を見つける。母親はウィルの面倒を見て保護者の役割を果たすことができない。ウィルは、あらかじめ、子どもらしく守られる環境を奪われ、むしろ、親の世話を背負い込んでいる。

失踪した父親はジョン・パリー (John Parry) という探検家で、実は、偶然に見つけた別世界への入り口を通り、ライラの世界を訪れ、スタニスラウス・グラマン (Stanislaus Grumman) 博士という別名での探検家として知られるようになり、北方のタタール族のあいだではシャーマンにもなる。家族を捨てたのではなく、戻れなくなっているだけのパリーは、けがの流血を止めるブラッドモスという植物の権威者でもある。「神秘の短剣」を持ったウィルは、逃げてきた洞窟で運命のように彼に出会う。2人は互いに気づかず話をする。パリーはウィルの「神秘の短剣」が、オーソリティに叛逆しようとしているアスリエル卿を助ける武器になるから届けるようにいい、けがをして流血が続くウィルの指をブラッドモスの軟膏で治す。これが父親とウィルとのほぼ唯一の、わずかなつながりであ

る。

漏れた光から互いの顔を見て、生き別れていた父子であることを悟ったのもつかのま、ジョン・パリーは死ぬ。彼に横恋慕していた魔女のユタ・カマイネン (Juta Kamainen) が洞窟に来て感情を高ぶらせ、自分の方を向いてくれなかったことを恨んで刺し殺すからである。ライラの世界の魔女族はきわめて長命で、美貌を維持していても、400歳を越えていることもまれではない。魔女は人間の男性と恋をし、子どもを生み、男の子の場合は人間世界に、女の子の場合は魔女になる。どんなに愛していても、人間の男は魔女よりもはるかに早く年を取り、寿命を迎える。魔女は悲しい恋愛を何度も繰り返しながら、魔女族で暮らしている。ジョン・パリーには妻とウィルがいるため、ユタ・カマイネンの求愛を断ったが、魔女にとって、それは屈辱である。ウィルは、父と魔女の不倫という非一家族的な性愛関係に傷つくことなく、父親らしいふるまいによって守られ、家族らしい絆の残滓を受けることができるが、それと引き換えにジョンは死ぬ。ウィルもまた、決して肉親には守られない、保護してくれる家族を持たない少年なのである。

3. 共同性と新しい家族のかたち

(1) ジブシャン

ライラとウィルに、あるべき肉親の庇護は与えられていない。では、作品の中では、どのような形で肉親家族に代わる共同体が構築され、新しい家族のかたちを示しているのだろうか。

まず、ライラの世界には、ロマ族を思わせる「ジブシャン」という民族集団がいる。既存の境界を自由に行き来し、舟で暮らす民族で、一見、陸地に暮らす一般市民と分離しているようであるが、実は、仲間のネットワークが張りめぐらされていて、外で何が起きているのかという情報は、すべてリーダーのところに届けられる。それぞれの家族は、家と同じ機能を持つ平底舟を持ち、運河や海を自由に行き来している。作中で、最も越境性を持つ集団である。

ジブシャンの統領のジョン・ファー (John Faa) は、統率力があって頼もしい。知恵をたくわえ、物事を見通す力のある賢人のファーダー・コーラム (Farder Coram) は、ジブシャンの世界以外のこともよく理解し、名前は「父親」をほうふつとさせる。ライラは、オックスフォードの学寮で暮らしていた少女時代、町の子どもたちをひきつれていたずらばかりしていた。子どもらしい戦いごっこの中で、ジブシャンを狙うことも多く、ライラはジブシャンと自分が敵対関係にあると思いついでいる。

しかし、本当は、ジブシャンは外の世界のことを見守り、制度の中にいる人々とは一線を画しながら、独自の情報網と連携の仕組みを持っている。たとえば、学寮で調理見習いの仕事をしている青年はジブシャンとの混血で、ライラも含めた子どもたちの動向は、彼を通じてすべて統領に伝えられている。ジブシャンにとって、生意気なライラも、守るべ

き子どもの1人である。ライラは、ダストの本質を探る試みの中で、「イブ」の役割を果たすことになる特別な少女であるが、ジプシャンにとっては、アスリエル卿の娘である。アスリエル卿は、かつて、ジプシャンたちが自由に海峡や運河を通れなくなる法律が作られようとしたときに、それを阻止したジプシャンの恩人で、その恩義がライラに向けられる。

ライラは、学寮に預けられた自分に乳をくれたのは、ジプシャンの肝っ玉母さんであるマ・コスタ (Ma Costa) だったことを知る。マ・コスタの実の息子のビリー・コスタ (Billy Costa) はライラの遊び仲間、ビリーがゴブラーにさらわれたことで、ジプシャンが不穏を感じ、ライラに協力することになる。

ジプシャンの共同性は、拡大家族の概念にも近く、個々の家族がありながら、ジプシャンとして統制された家族のようなつながりがその外側にあり、他の家庭の動向や縁戚関係もすべて互いに筒抜けである。血縁や親子関係の拡大を通じて形成される拡大家族に近い人間関係があり、どの家の子ともども、ジプシャン全体で育てる。それぞれに核となる家族がありつつも、婚姻関係や友情関係で複雑に深く結びつき、全体として、民族集団というよりはひとつの家族的な有機的集合体を形成している。その共同性にライラは救われる。赤ちゃんのときには乳を与えられて生きのび、ゴブラーに追われているときには、船底の隠れ場所にかくまわれる。血もつながらず、民族集団も異なるマ・コスタは、ライラに、人間らしい原初的な母親のあたたかさを、自分の息子に対するのと同様に与えている。

(2) ユートピアとしてのミュレファの世界

ウィルの世界の科学者のメアリー・マローン博士は、空中に開いている出入り口を通じていくうちに、不思議な生き物のミュレファの世界に入りこむ。ミュレファは「やせていて、皮膚は灰色、頭には角があり、短い胴はゾウみたいだ。草をたべる生きものとおなじダイヤモンド形の骨格だが、一本ずつある前脚とうしろ脚には、なにやら車輪みたいなものが生えていた」(Amber [邦訳] 117)。車輪は、さや植物から採れる種子を磨いたもので、ミュレファはそれぞれの身体に合わせてはめこみ、移動することができる。そこは、人間とはまったく異なる生きものの世界である。

パラレルワールドの中で、メアリーは、ミュレファたちがいかに平和のうちに互いを思いやりあい、知的にすぐれているかに感嘆する。言葉を持ち、さらにはメアリーをまねて英語でコミュニケーションをとろうとし、集落をつくり、火をおこすことができる。メアリーは、村の中でミュレファとともに過ごす時間をかけがえなく思い、自分の世界では得られなかった平安を感じる。ミュレファは、網を作って、猟や日常生活に用いる。メアリーは網づくりを手伝うときに、ミュレファにはない自分の手の構造が強みになって、2人1組で網をつくるミュレファより早く上手にできるだろうと考える。

メアリーなら自分ひとりで結びめをつくれるだろう。はじめ、メアリーはこれが強みになるとおもった——ほかのだれも必要としないのだから。が、やがて、そのせいで

自分が孤立してしまうことを知った。たぶん、人間はみんなそういうものなのだろう。それに気づいてから、メアリーは片手だけを使って結びめをつくることにし、親友になった女性のザリフと、指と胴体をうまく合わせて動かしながら共同で作業するようになった。

(*Amber* [邦訳] 166)

ミュレファの世界にある共同性にメアリーも救われ、人間とはまったく異なる形状の生きものたちの世界が、人間の世界よりもはるかに調和的であると思う。これは、家族的な役割を果たす共同体像の提示となっている。

ミュレファの世界に、メアリーは癒される。二項対立ではなく安らぎの中で協働しあえる家族的関係にいたことで回復する。最終的に、彼女は、ライラとウィルを見つけて自分の役割を果たし元の世界に戻ったあと、ウィルを助け、一緒に暮らしていこうと提案する。

(3) ライラとウィルの愛の形

神学に挑戦するような壮大なファンタジーの中で伝えられているのは、子どもから大人になるときに得られるエロスの愛情の肯定である。*Paradise Lost*においても、神対サタンの戦いの中に、アダムとイブの、互いに分かたれない愛の追求がある。知恵の木の実を食べたイブをアダムは責めずに、運命を共にすることを伝え、どんなにつらい未来でも、生き、働き、子孫を残し、死んで塵に帰る道を選ぶ。神もそれを承知し、神の子キリストによる救済と贖いを予言し、大天使を遣わして荒れ野まで導く。荒れ野は、エデンの園に比べれば、茫漠とし、不毛で苦労ばかり多い土地に見える。しかし、そこで生き抜こうとする2人は、その苦痛の中にわずかにある喜びを予測し、エデンの園から出て歩み出すことじたいが、神からの祝福であると考えることができる。このとき、楽園追放は、2人の人生への出立となり、不毛の荒野は、これから乗り越えていく試練であると同時に希望すら投影できる場所になる。

*The Amber Spyglass*の終盤、死者の国から帰還したウィルとライラは、互いに深く愛し合っていることに突然気づく。性愛は、児童文学やファンタジーの中でも、あえて避けられることの多いモチーフだが、2人の初めてのキスはきわめて印象深く、互いに互いを求めあうように、口と口がぶつかりあう。ウィルとライラは運命づけられていたアダムとイブである。そして、アダムとイブでありながら、住むべき世界は別々で、最後に危険な短剣を壊し、互いの世界に戻ったら、ウィルは自分の手でライラの世界に続く入り口を閉じなくてはならない。

ウィルとライラは、本来、共に生きていくべきアダムとイブであるが、それはかなわない。だが、2人は別々の世界で、それでも、心の中で手を取りあって生きていくことを信じ、より深い次元で結びつきあうことを誓う。2人は、それぞれのオックスフォードに戻るが、時空を超えて同じ場所にあるベンチに、年に1度、夏至の日に1時間だけ座り、もう二度と

会えない別世界にいる「自分の片割れ」を想うことを約束する。

知恵の木の実—ダストの正体は、目を開き、性愛的なあたたかさを求め、人間らしい関係性を結んで、荒野を歩いていく知恵と勇気を自分の内から呼び覚ますことを促す力である。ライラとウィルはダストによって目覚め、「家族」になるために、血のつながらない者同士だからこそ可能なロマンティックな愛を体感し、その記憶をもって荒野を生きていくことを決心する。

その愛のすばらしさはヘビの役割を果たすというマローン博士によって、2人に伝えられる。マローン博士はカトリック教徒で、両親の願いに添い、修道女だった過去がある。教会にこもってお祈りをするのではなく、十字架は身につけるものの、平服を着て、町の中で一般の人々の間に入っても不自然ではなく、大学院で物理学の勉強も続けていた。だが、ある日、学会で研究発表をした後の食事の席で恋に落ち、12歳の頃の初恋のことも思い出す。その心の揺れを、マローン博士は、これまでと180度変わったことと捉えて「中国に行く」と表現し、「わたしは思ったわ。あの気持ちを二度と味わうことなく、残りの人生を送るのかしら？ 中国へ行きたい。中国は、宝となぞと神秘とよろこびに満ちている」(Amber [邦訳] 569) と考え、十字架を海に捨てて、世俗の中で生きていくことを決めるのである。

イブを誘惑するヘビは、通常では、忌むべきものとして嫌われ、恒久的に地を這うみにくい生きものになる。だが、*His Dark Materials* シリーズでのヘビの役割は、人間に知恵と愛情を持ってパートナーとの関係をつくっていくことの美しさを伝えることにあり、おとしめられることはない。

おわりに

ファンタジー作品はもともと、家族という形態に対して先進的な見方を提示しうることが多い。温かく庇護的な肉親を置き去りにして、あるいは、暴力的に抑圧する肉親から逃れることで、ファンタジーの登場人物は旅に出る。異世界への冒険や、最果ての世界の探求は、親からの一種の逃走となる。孤独になった主人公は、道の途中で血縁に拠らない家族的な人間関係を取り結べる仲間を見つけ、その共同性の中で自己を確立していく。これは、ファンタジーという文学形式が、孤立的な主人公が試練の克服をおこなう民話や昔話のプロットと親和性が高いことも影響しているだろう。肉親のいる環境を後にして、新しい人間関係を「家族」という形態も含めて探っていけるのがファンタジーの強みかもしれない。

新しい家族のかたちとして、堅牢で制度的な家族とはかけ離れた共同体像が *His Dark Materials* には描かれている。他のファンタジーでも、アメリカのル・グウィン (Ursula Le-Guin, 1929-) の *The Earthsea Series* の4作目 *Tehanu* (1990) では、魔法の力を使いつくし、ただの初老の山羊飼いに戻った大魔法使いゲド (Ged) とカルガド帝国の巫女

だったものの、囚われの墓所から逃れて亡命し、そのまま土地の男性と結婚したのちに未亡人になったテナー（Tenor）、肉親から虐待を受けてたき火の中に置き去りにされてやけどを負った状態で引き取られ、のちにドラゴンの娘であることが判明するテハヌー（Tehanu）が、欠落を抱えたり試練を乗り越えたりした者同士として寄り添いあう。彼らは、ささやかだがあたたかく、地に足のついた暮らしを営むときの港となる家庭を築いている。リアリスティックな作品には描きえない冒険や試練と、その経験ののちの人間関係としての新しい家族のかたちもまた、ファンタジー作品だからこそ描けるともいえるだろう。

His Dark Materials は、孤児であると思い込んでいた少女ライラが、自分の本当の両親が誰であるかを知り、託された役割を果たすための旅にまきこまれる物語である。魔女やシロクマなど様々な種族の人物たちからの助力を受けながらダストの秘密をさぐる中で、ライラは別世界からきた少年ウィルに出会う。旅の中で精神的な親殺しがおこなわれ、2人はカップルになるが、最終的にはそれぞれの世界に戻り、永遠の分離をよぎなくされる。肉親を捨て、あるいは、肉親からの保護をまったく受けることができないところを出発点とし、ともに戦い、進んでくれる異種族の仲間を疑似家族とする点や、分かたれて、永遠の愛をとどめる精神的夫婦—すなわち「家族」像を提示する点で、壮大な宗教性やパラレルワールド構築の試みの中に「新しい家族のかたち」への模索も見取れるのではないだろうか。

【引用・参考文献】

- Pullman, Phillip. *The Amber Spyglass*. 2000 (『琥珀の望遠鏡』 大久保寛訳. 新潮社, 2002.)
 ———. *Northern Lights*. 1995. (『黄金の羅針盤』 大久保寛訳. 新潮社, 1999.)
 ———. *The Subtle Knife*. 1997. (『神秘の短剣』 大久保寛訳. 新潮社, 2000.)
 Bird, Ann-Marie. “Without Contraries is no Progression: Dust as an All-Inclusive, Multifunctional Metaphor in Philip Pullman’s “His Dark Materials”” *Children’s Literature in Education*. (2001) 32: 111-123.
 Le-Guin, Ursula. *Tehanu*. 1990. New York: Simon and Schuster, 2012.
 Milton, John. *Paradise Lost*. 1667 (『失樂園』 平井正穂訳. 岩波書店, 1981.)
 Oliver, Chantal. “Mocking God and Celebrating Satan: Parodies and Profanities in Philip Pullman’s His Dark Materials” *Children’s Literature in Education*. (2012) 43: 293-307.
 川口喬一, 岡本靖正編『最新文学批評用語辞典』研究社出版, 1998.
 グリビン, メアリ, ジョン・グリビン『フィリップ・プルマン「ライラの冒険」の科学』松村伸一訳. 松柏社, 2008.
 トールキン, J. R. R.『妖精物語について—ファンタジーの世界』猪熊葉子訳. 評論社, 2003.
 ユアン, マーガレット・S『フィリップ・プルマン—「ライラ」からの手紙』中村佐千江訳. ぶんけい, 2007.

注

- 1) 原文は“fairy story”でトールキンは「諷刺、冒険、道徳、空想など、その主な目的が何であれ、妖精の国に触れ、それを扱う物語」(トールキン, 26)を意味している。ファンタジーという文学形式とほぼ合致している。
- 2) クリステヴァの用語で、あらゆる文学テキストは先行する他の文学テキストと相互依存の関係にあるという考え方。(川口喬一 & 岡本靖正, 62)

Unconventional Families in Fantasy Literature — On *His Dark Materials* series —

Hiroe SUZUKI

His Dark Materials is an epic trilogy of fantasy novels by Phillip Pullman (1946-) consisting of *Northern Lights* [US: *The Golden Compass*] (1995), *The Subtle Knife* (1997) and *The Amber Spyglass* (2000). Within its multiple, parallel worlds, the protagonist girl, Lyra, aged 13 and Wil, around the same age, figure out the mystery of particles called “dust.” The series is based on *Paradise Lost* (1667) by John Milton, and the children, representing Adam and Eve, resume the order of the worlds through their adventures. In the novels, both Lyra and Wil’s parents are far from being guardians. As compensation, the story offers several unconventional figures of families. First is the “Gyptians” that protect Lyra while she is chased. Second is the world of “mulefa” which are peculiar creatures with quarry skeletons. Their community life is so lovable and harmonious that Dr. Malone from Wil’s world finds it touching. Third is the relationship between Lyra and Wil. Though they fall in love with each other during the adventures, they have to be parted eternally because they live essentially in different worlds. Similar to “the Expulsion from Paradise” in *Paradise Lost*, Lyra and Wil bravely step back into their worlds by themselves holding unforgettably romantic ties that could have been a matrix of a family of two.

Keywords : Pullman, *His Dark Materials*, love, family, community
